

壬申之亂 : 文苑

著者	笠間, 益三
雑誌名	龍南會雜誌
巻	21
ページ	27-28
発行年	1893-12-20
その他の言語のタイトル	壬申之乱 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4151

或云其千載
 以て世トシテ
 念ヲカキ
 懐激條希
 心ニ至リシハ誠
 吾人同姓ト傳
 かん次分ナリ印
 各其天命ヲ
 洒腔、句性也

弄其文墨邪しと、彼が志實に悲むべきなり。

若し武帝をして大活眼を開きて李陵が心を看破せしめ、彼が心を故國に維かしめ、遂に鼓撫獎勵以て時機を待て發せしめば、以后數百千年間、中國を苦しめ、幾多の壯者を犠牲に供せしめ、老幼をして道途に泣かしめ、父子夫婦兄弟姉妹をして離苦の涙に咽はしめし匈奴も、或は彼が一臂の力に挫け、百萬の蒼生をえて各其堵に安んせしめ、同胞離るゝあゝ、君臣相安んじ、下は魚鼈より上は飛鳥に及び、各其天命を終へしめえやも計り知る可からず。然り而して、李陵其人の如き偉人が、三尺の童子にすら不忠と呼ばれ、破廉恥漢と詈られ、無節操の賤奴と嘲けらるゝを聞けば、誰れも無然たらざるものあらん哉。

彼を思ひ、又此を思ひ、世上幾多の李陵あるを知り、萬感蟄集し、覺へず天を仰げば陰雲暗淡、凄風蕭颯、男子百鍊の鉄腸も斷んとす。

文字勁健、快劍の陣を斫るが如く、一讀人をして神爽意快からしむ。蓋し詞兄一隻の史眼、よく紙背に徹底し、李陵が心情を看破し、滿腹の同情を寄せ、以て此文を草せしもの、宜あり、その情到り筆隨ふの茲に至るや、衆憤の故を以て不白の辜に遇ひし李陵にして知るあらば、千載の下此真知己を得たるを喜ぶや必せり。

癸巳十一月中院

辱友河陽生妄批

文苑

壬申之亂

教授 笠間益三

服群臣之心。不能徒服之。必有足以服之者焉。失群臣之心。非徒失之。必有足以失之者焉。余讀史。每至壬申之亂。未嘗不容疑焉。夫大海人。雖叔分爲人臣。弘文雖姪名爲人君。以臣奪君。乃天下之大變也。而人臣之向背頓異者何也。弘文果有足失群臣之心者歟。吾未見之。適觀其器局英發。有人君之度。不愧爲天智之嗣爾。而及大海人一舉兵于吉野。群臣之中。向彼而背此者。沛然有不可遏之勢矣。是吾之所以不能不容疑焉。上下反覆。潛慮沈思。而後始知出於天智之處置失宜。而不足深怪也。天智之四年。使弘文爲太政大臣。是天智之失策也。夫太政大臣。雖尊爲人臣之位。雖重爲人臣之職。使他日嗣大位之皇子。居人臣之位。司人臣之職。以示中外。中外或謂他日傳大位不在皇子。而在皇弟。故豫置皇子於人臣之地。而爲之極也。蓋皇極以后嗣舒明。孝德以弟嗣皇極。齊明以姉嗣孝德。由是觀之。不必傳位於子者。舒明以來如爲例者。故中外之設心。亦未足怪也。是以天智晏駕。陵土未乾。輒尋干戈。豈可不惜哉。嚮使帝夙立弘文爲皇太子。以繫中外之望。以帝之德。加以太子之賢。中外豈肯不往此。而往彼。不謳歌此。而謳歌彼乎。故曰壬申之亂。出於天智之處置失宜。而不足深怪也。

明治二十六年の秋に熊本ある第五高等中學校數百の人々と軍裝して大分縣をどへまからんとするをりあらかじめ作れる道ゆき。